

# 詩とことば

\* 8月

阿部 公彦あべ ますじこ

作家の開高健は食べ物をめぐるエッセイでも知られた人だった。彼からすると、日本の小説では食欲や料理の扱いが物足りなくて、お高くとまった文学が「食」を侮っているように思えた(『最後の晚餐』(光文社文庫)。

今やメディアには食の話題があふれている。美食も珍味もたっぷり。でも、食といつてどこか日常の中の日常、身も蓋もない現実との感もある。ブログの日記に書くにはびったりだが、ロマンスやアクションに比べるとやっぱり地味。しかし、現代詩はそんな地味な現実感をこそうまく題材にしてきた。先頃亡くなった長田弘の代表作『食卓一期一会』(『長田弘全詩集』(青土社)はまさにそんな詩集で、たとえば「朝食にオムレツを」では「ピーマンを小さく角切りにした。トマトも小さく角切りにした」と調理法から始まった詩が「正しいといふことはとてもさびしいことだった」という最終行に至る、その展開に人生が縮約されていく見事だ。

それとしてもレシピに詩学が宿

## 料理のレシピに宿る詩学

ることを見いだした長田は慧眼だったと思う。よけいな粉飾や情緒を排し、淡々として合理的なのに何か立ち昇ってくる。肉じゃがの作り方一つでも油断できない。実際の料理本から一例を見てみよう。「牛肉は食べやすく切る。じやがいもは皮をむき、大ききによって2〜3等分に切って、水にさらす。玉ねぎは芯をつけたまま、6〜8等分のくし形に切る。しらたきは下ゆでして、食べやすい長さに切る……」(土井善晴『土井家の「一生もん」2品献立』(講談社)。

どうだろう、この無駄のない手順。リズム。何だかむずむずしないだろうか。何か起きそうではないか。さて。今月は鈴木東海子『桜まいる』(書肆山田)の、冷たい風の吹き抜けるような感覚が気になった。微妙な語のずらし。語尾の引っかかり。そして情念を散らせるかのような語りの連鎖。「花びらは積りわたしの輪郭であるが線状にではなく立体的にまつわり白いわたしは花びらになっっているように内がわの雪が冷たくするわたしであるから叫んでいるのは白い雪だけで雪の声でとける花びらになっってしまう。繊細で「違和感」を組み立てていく詩行に、神経を刺激された。

(東大准教授)